



東北大学

# 曙光



(しょうこう)

2009.4.1  
東北大学全学教育広報 No.27



川内サブアリーナ棟が完成しました



## 今後の大学における教育研究と社会貢献

東北大学総長 井上 明久... 2

## 退職教員から

○後輩となるFくんへの手紙  
前教育学研究科教授 宇野 忍... 4

○教養と社会の批判的自己認識  
前農学研究科教授 大鎌 邦雄... 6

## 特別寄稿

○川内北キャンパスの今昔 - 回想断片 -  
前放送大学宮城学習センター所長 大橋 英寿... 8

○農を学び・教育を思う  
総長特命教授(教養教育院) 秋葉 征夫...10

全学教育通信(学生生活についてのご案内)...12

平成21年度全学教育科目の授業日程について ...15



## 今後の大学における教育研究と 社会貢献

東北大学総長 井上 明久

昨年の初めに米国でのサブプライムローンに端を発した金融危機が瞬く間に世界中に波及し、1929年の世界大恐慌以来の深刻な不況が日本を含む世界の国々を襲っている。この世界同時不況は実体のないペーパーマネー体制の終焉を告げるものであり、また同時にものづくり産業を基盤とする实体经济社会の再到来を意味している。しかし、ものづくり産業構造においても大きな変革を迫られているように感じている。20世紀型のエネルギーや地球資源を大量に消費し、二酸化炭素濃度の増大による地球温暖化をもたらしている産業を基盤とした大量生産・大量消費型の社会発展が限界に近づき、省エネ、省資源、地球環境調和型の産業をより積極的に興す必要に迫られている。この種の産業基盤構造への転換にはかなりの時間が必要であり、今後数年間世界レベルの経済不況は続くものと予想されるが、この不況を脱する時には社会の産業構造は大きく変化したものになっていることが予想される。すなわち、20世紀型から地球資源枯渇化、温暖化、少子高齢化、安全・安心医療、食料や水の安全と確保、情報の氾濫などの諸問題の克服に貢献する産業基盤構造に変化する過渡期を迎えていることとも関係していると推測している。

このような大変換期を迎えている今日において、大学の教育研究の組織体制や社会貢献の在り方も再検討を迫られていると思っている。これを先取りした形が、19世紀後半から20世紀前半に創設された学部群とそれらに基づいた研究科群の他に、20世紀末より創設され始めた情報科学、環境科学、生命科学などの新しい研究科群への変化である。本学ではこれらの新研究科群の創設後、昨年医工学研究科が創設され、またエネルギー関連の研究科の創設も検討されている。このような変化は理工系を中心とした自然科学系のみならず、東北アジア地域に限定されているが、人文社会科学系と理工系との融合を目指して設立された東北アジア研究センターにも見ることができる。これらの新設研究科群や新センターは、従来の学部・研究科群が各専門分野の学術の高度化・深化を目指しているのに対して、分野横断、異分野融合の視点を積極的に取り入れた新しい学術創成の流れに沿った中で創設されたものであり、教育・学術の多様化、学際化、高度化および社会状況の変化に則したものと見える。

東北大学ではこの組織体制の改変を全学規模でさらに押し進めた結果、複眼的視野を持った異分野融合型の若手人材養成を目指した大学院教育の支援組織である国際高等研究教育院と高度若手研究者の育成を目指した国際高等融合領域研究所から成る国際高等研究教育機構を平成19年4月に設置した。各教員のこれまでの高度化、細分化された教育研究成果を融合・体系化させてシナジー効果を発揮できる組織体制を構築して、21世紀の人類が立ち向かわなければならない地球資源枯渇化、温暖化、

少子高齢化、安全・安心医療、食料・水、高度情報化などの諸課題に、総合的に対処できる高度で幅広い基礎知識と学術研究能力を持った人材育成を目指した新しい仕組みとなっている。国際高等研究教育機構で取り上げている融合・体系化分野は、生体・エネルギー・物質材料、ライフ・バイオ・メディカル、先端基礎科学、言語・人間・社会システム、情報工学・社会、医歯工学融合の5領域基盤であり、東北大学の人文・社会科学、理工学、生命・医歯薬農学分野のすべての研究科と研究所群が関与している。これらの領域基盤に基づいた異分野の融合・体系化した学術研究の推進と人材育成の成果を生かすことにより、20世紀型と大きく様相を異にする21世紀型の地球環境調和および社会環境変化に適応した産業の発展に寄与でき、豊かな発展持続型の社会構築に貢献できるものと確信している。

しかし、これらの諸問題を解決して地球環境に調和した新産業に結びつけることは、これまでの見習うべき先行事例があるわけではなく、我々自身で解決策を見出さなければならず、新しい問題を創造し、解決できる人材を育成することが要望されている。そのためには、2年前に公表した「井上プラン2007」において提唱している、何事にも前向きに果敢に挑む「挑戦力」を持ち、しかも十分な基礎学識を習得した上で自己研鑽を積み重ねることにより培われる「創造力」を身につけ、新しい社会的・経済的価値を生み出す「革新力」を持った人材を育成することが重要である。

このような時代の流れをも考慮した取り組みの推進が、東北大学が世界と地域の人々から尊敬と信頼を集める世界リーディングユニバーシティとしての発展に繋がるものと思っている。



退職教員から



## 後輩となるFくんへの手紙

前教育学研究科教授 宇野 忍

F君、入学おめでとう。仙台での生活にもそろそろ慣れてきたことと思います。東北大学の授業はどうですか。今日は、希望を持って学び始めただろう君に伝えておきたいことがあって、この手紙を書いています。

私は1965年に東北大学教育学部に入学し、1972年に大学院博士課程を中退して助手に採用されて以来、大学院教育学研究科・教育学部に籍をおき、いわゆる教育と研究とに従事してきました。だから、私は年齢だけは大先輩というわけです。こんなに長く一つ所にいた研究者など、化石のような存在であり、キャリア不足のへっぼこ研究者だと見なされてもおかしくありません。しかし、へっぼこであってもなくとも、その研究者なりの考えはあるものです。私は教授学習過程、例えば授業の心理学的研究に明け暮れてきましたが、最近、こういうふうに学べばよいのではないか、と思うようになりました。勝手ですが、F君、君にそのことを伝授しておこうと思います。断っておきますが、何しろへっぼこ研究者の話だから、役に立つかどうかは（立つとは思いますが）君次第というところがあります。ただですね、今では私の同業者で、立派な研究者・大学教師になっている後輩の友人は、「宇野さんが大学院にいたから、自分は大学院に行こうと思ったし、大学院でやっていると聞いた」といいます。楽しく遊んでいる私を見て、そう思ったのでしょうか。この友人と同じように、君もこの文章を読んで、その道に

などと妄想を抱いてくれれば、私の目的も半ば達せられるというものです。それから、話を始める前に付言しておきますが、学ぶと遊ぶを排反的に考えてはいけません。学ぶことは遊ぶことであり、遊ぶことは学ぶことです。

こう思う思い出があります。小学校4年生の時、Hちゃん宅の門先にある大きな桜の木の下に、フクロウが棲んでいるのを見つけました。梯子をかけて覗くと卵がありました。Hちゃんと相談し、3個卵を失敬し、一個はHちゃんのお母さん用に残し、二個を目玉焼きにして二人で食べたのです。フクロウは夜に目が見える、その性質（物質）は卵にもあるに違いない、だからその卵を食べれば私たちも夜に目が見えるようになるに違いない、と考えてのことでした。それから、二人は、暗い押し入れの中で、目が見えるようになるのを今か今かと待ったのです。どれくらい経ったでしょう。ついに見えるようにならないまま（当然ですね）、Hちゃんのお母さんに発見されるところとなり、大笑いされたのと同時に、私たちは私たちの考えが成立しないことを知ったのです。卵が受精卵だったらフクロウ夫婦には大変申し訳ないことをしたのですが、ことほど左様に、遊びは学びであり、学びは遊びなのです。やりなさいといわれたり、こうしなさいといわれずともやりたくなり、その結果今までわからなかったことがわかる、できなかったことができるようになる、遊びも学びもそういうものです。

だから、「先生から正しいことを教えてもらい、それを暗記して学び、問題が出たら再生して答えよう。それが学ぶということだ。」などと、さもしい学びの考えをしてはいけません。

こうすると、君は「自分が高校までの勉強でやってきた勉強の仕方を宇野さんは否定するのか」というかもしれません。しかし、そういうつもりではありません。君が高校までやってきた勉強は、機械的な暗記に頼る学習といえると思います。これは学習のタイプの一つに過ぎません。心理学では機械的学習と呼ばれるタイプです。問題が出されたときすぐに答えを出せるという意味で効率的ですが、バラバラな事実を覚えるので、忘れやすいという欠点があります。私たちには苦手な学習のタイプです。

こうすると、それなら他に学習のタイプがあるのかと問われそうなので、先回りして答えましょう。実はあるのです。それは、意味や訳を追求してルールを学ぶ有意味学習といわれるタイプです。このタイプの学習は、次のようなプロセスで進行します。「この世の中の不可思議なものもことどもを見つけたら、ものどもことどもにあなたはどんな性質を持っているかと問い、こうもあろうかと仮説を立て、この仮説が正しいとしたらこういう現象が起こるといいと予測し、実験という拷問にかけ、その性質を自白させて、問題を解決する」というプロセスです。私はこちらのタイプの学習が本当の学ぶという行為だと考えています。本当の学びは、自分の考えが当たったり外れたりしてハラハラドキドキする、楽しいものです。先に、私の小学校4年生の時の体験を書きましたが、私は、「あれは有意味学習だったなあ」と今になって実感しています。もちろん、理科の先生に、「フクロウの卵を食べると夜に目が見えるようになりますか」と聞き、「ならないよ」と教えてもらうのも学習ですが、これは簡便な学習です。問題を解くのは、問題を見つけ答えを知りたい本人ではなく、他人の教師だからです。そうで

はなく、フクロウの卵に、「あなたを食べると目が見えるようになりますか」と問い、卵に「食べて」と答えてもらい、卵を食べるという危険な実験的行為（卵に熱に強い菌などがついていたら）をし、「私を食べても夜目が利くようにはなりませんよ」と性質を自白させて、「ああ、そうだったの。卵の中には夜目を利くようにする物質はないんだな」と納得するのが、本当の学習です。この学びは、子どもも大人も、教師も学生も、研究者や科学者もみな同じです。学ぶということは研究することであり、問題を解決することだといえるのです。それから、教師は人間の教師ばかりでなく、社会や自然の中のものどもことどももりっぱな教師です。

そうするためには、F君、君は失敗やつまずきを恥じてはいけません。失敗を大事にして、じゃあホントはどうなんだと問いなさい。解きたい問題が見つかります。何か一つのことを知ったら、その後に「なぜ」「例えば」「でも」などとことばをつなげなさい。問題が見つかります。「1192年は鎌倉幕府の成立だ。」と知ったら「でもなぜ1192年なのか」と問いましょう。「頼朝が征夷大將軍に任ぜられた年だ」とわかります。「じゃあ、室町幕府も徳川幕府もリーダーが征夷大將軍になったときが幕府の成立なのか」と続けましょう。解きたい問題が見つかり、それを解くと幕府成立のルールが見つかるはずで、「社会科は、歴史は暗記科目だ」などと考えるはいけません。自然であれ社会であれ、ものどもことどもの背後には、必ずそれを生じさせているルールがある筈です。

「じゃあ、宇野さんは研究者として教える学ぶという行為にどういう心理学的ルールを見つけたのですか」ですって。その話はまた後にしましょう。とにかく、つまずきを大切に、問題を見つけ解決して、ハラハラドキドキしながら、楽しく主体的にルールを学んでください。

もうお別れの時が来たようです。じゃあ、また。お元気で、さようなら。



## 教養と社会の批判的自己認識

前農学研究科教授 大 鎌 邦 雄

東北大学農学部に赴任して以来12年間、学部の授業に加えて、毎年全学教育の授業を行ってきました。当初は「経済と社会」を、数年前のカリキュラム改革後は「歴史論」を担当しました。テーマはいずれも昭和期もしくは戦後の高度経済成長と社会の変化に焦点を置きました。戦前期農村社会を歴史的に検討するという私の研究領域とは、必ずしも一致しません。しかし、このテーマで入学直後の1年生に授業を続けてきたのは、教養とは何かという問題に対する多少の問題意識があったからです。このことについて私見を述べてみたいと思います。

以前から教養主義の衰退がいわれております。確かに私達の学生時代と比べて、近年の学生は、読書傾向が大きく変わっているように思います。私達が学生時代、理系や文系を問わず多くの学生は、いわゆる「古典」といわれる文学書を読んでいた、もしくは読まなければいけないという強迫観念を持っていたように思います。学生という社会に対する確実な「手応え」を持つことが難しい時期に、自分なりに人間とは、社会とはという問を持っていました。その答えを「古典」の中に求めたのです。得られた解答はもちろん稚拙なものでした。でもそれをめぐって友人と議論することにより、互いに生きることの意味を、観念的ではあれ確認しあい、そして新たな問題に取り組んだように思います。こうしたことが私にとって「教養」だったのです。

10年ほど前、他学部の受講生がわざわざ雨宮

キャンパスの研究室を訪ねてきたことがありました。2時間ほど読書についてとりとめない話しをしました。彼は現代作家の一人の小説を愛読していました。その都会の風景描写が、自分の心象風景を適切に表現しているというのが理由です。しかし彼の感性には人間やその生活の重さに関する問題をうかがうことができず、ふわふわした浮遊感があるだけのように思われました。

彼との話を終えたとき、社会の変化が見て取れるように思いました。彼と私は僅か1世代の時間的隔りがあるだけです。その時間が学生の観念や社会への問題意識を変えてしまったのではないか。そうした観点から戦後の社会とその変化を現在の学生に話さなければならないと思いました。

東北大学に赴任する前に在職していた研究所は、農業経済や農村社会を研究対象としていたところで、自由な雰囲気にも包まれていました。研究員はそれぞれの研究テーマに即して農業問題を研究しながら、現実社会との関連をたえず意識していました。

私は戦前期の農村社会史をテーマにしております。戦前期の農民が生涯を送った生活世界は、強い共同体的関係が存在しました。共同体の相互扶助や対外関係が、農民の生活と生産を支えていました。共同性に包まれることにより、農民は生存を保障されたのです。そのために農民は、慣習慣行にあわせて自己の行動を自ら拘束していました。つまり共同体の成員から

期待される「役割期待」に沿って行動することで、農民相互のつながりを維持してきたのです。こうした共同性のありかたは、農村だけでなく広く日本社会のいたる所に見られたものであり、戦後もある時期まで強固に存続し、私を含めた日本人の行動様式を規定したように思います。このことが私の研究を支えるモチベーションの一つでした。

ところで教養とは何でしょう。私は自分の行為の社会的意味を認識できる能力と考えています。この能力の基礎には、社会の中における自己の位置を認識する能力を併せ持つことが必要です。人間とは孤立した存在ではありません。社会を構成する一員であり、多様な人間関係に包まれています。そうした「社会の中の自己」を相対化しつつ認識した上で行為することが、教養を持つ人の「知的」行為ではないでしょうか。私が尊敬する経済学者は、「社会の自己認識」にこそ社会科学の「効用」があると指摘しています。それはまた社会に規定された自己を認識する方法でもあらうと思います。

10年前に読書論を交わした学生から受けた「浮游感」や人間関係の「希薄」さは、その後の学生に一層強く感じます。そしてそのことへのとまどいが一層強くなっているように思います。もちろん明確な人生の目的を持っている学生もおりますが、しかし卒業間近になって「自分は何に向いているのか」という問をしばしば発することがあります。「自分が何をしたいのかわからない」という学生も少なからずおります。その問が発せられる理由の一端は、経済成長により共同性が薄れて人間関係が希薄化したこと、それ故社会の中で自己の位置を認識することが困難になったからではないでしょうか。

ということで私の全学教育でのテーマは、戦後の経済成長が社会における人のつながりをどのように変えてしまったのか、そのことによって現代社会はどのような問題を抱えたのかとい

うことをテーマにしました。

戦後の高度成長は戦前以来の貧困問題とそれに伴う社会経済問題を「解決」し、「豊かな」生活をもたらしました。しかしこの偉大な成果は同時に、農村や地域から多くの労働力を企業に吸収し、地域は「共同性」を支える主体を失ってしまったこと、家族の関係も大きく変えたこと、企業の成長を支えた終身雇用という「共同体」的關係は90年代以降のグローバル化の中で維持できなくなった等々のことを伴っていました。この結果、日本人は強い共同体的規範から開放され自由を手に入れましたが、しかしそれに代わる新たな社会の結びつきが形成されませんでした。それが人間関係の希薄化を招き、共同体的規範が持っていた「欲望」をコントロールする社会的機能が失われ、効率性が社会の全面を覆うことになったのです。戦後の経済成長はこうした「両義性」を持っていることを事実として指摘しました。

上記のような戦後の高度成長により大きく変化したという歴史性を帯びた社会の中に、私達は存在しているということ認識してもらうこと、それが「浮游感」の中で漂っている学生に必要な「教養」の一つであり、また戦後という歴史を学ぶ意味であらうと考えたからです。

もちろん15回という時間的制約の中で、話すことは限られております。また授業は、戦後史を学習してこなかった学生に対しては、どうしても一方的になりがちです。どれほど私の考えが学生の想像力を刺激したかどうか明確ではありません。しかし授業への質問票やレポートには、授業への批判を含めた積極的な反応が多少ともありました。

以上現代の学生像と「教養」について、私見を含めて述べてきました。学生は、社会に出て多様な経験を重ねることにより自ずと育っていきます。そうした卒業生と再会し成長を確認すること、それが定年退職後の大きな楽しみです。

## 特別寄稿



## 川内北キャンパスの今昔 - 回想断片 -

前放送大学宮城学習センター所長 大橋 英 寿

「近ごろの学生はまじめに授業に出席するんですよ。以前なら、5月の連休がすぎると混雑していた学食（学生食堂）もおちつくのに、今は年中混雑がつづくんです」。この原稿の依頼にみえた、全学教育担当の教務職員からそう聞かされて、私は「本当？ 信じられないな」と驚き、「でも心配だね。大丈夫なのかな」とつぶやいた。わが身と、われわれの時代を思い返してである。私が北海道の田舎から東北大学文学部へ入学したのはちょうど50年前の1959年である。半世紀も前のことで記憶は茫洋としているのだが、消えることのない鮮明な断片がいくつかある。

入学した年は、60年安保反対闘争の山場を翌年にひかえて、学生だけでなく先生方も少なからず高揚していたように思う。「安保反対」と手書きした大看板（タテカンという）やピラに川内キャンパスは埋もれていた。学生が教室に入るのを「授業放棄」を訴えるピケ隊が阻止し、連日のように学生集会やデモ行進がつづいていた。最盛期には、川内を出たデモ隊の先頭が広瀬通一番丁に達しても最後方のデモ隊はまだ川内で待機しているほどであった。受験生活からの解放感もあって私は当然のように集会やデモに加わり、部活（新聞部）にいそがしく、やりたいことが山ほどあり、教室にはめったに足が向かなかった。入学者はすべて、川内教養部で2年間をすごして所定単位を取得してからでな

いと学部へ進学できなかったので、気がかりではあったが。

戦後の学制改革で数カ所に分散していた教養部が、駐留米軍が撤退したキャンプ跡地の川内地区、今の北キャンパスへまとまって移転したのは、私が入学する前年の1958年である。その川内教養部の建物だが、教室も教官室も事務部もすべて、米軍が残して去った木造の兵舎であった。平屋もあれば二階建てもあり、形もさまざま。中央にそびえる大きな教会は講堂に、カマボコ形の兵舎はサークル棟などに転用された。

新たに建てられたのは応急プレハブの学生食堂くらいだったろう。食堂の壁には大きく「セルフ・サービス」と並んで「食器をアタックするな」と書かれていた。食器を失敬する学生が少なくなかったのである。当時のメニューと値段だが、かけそば27円、カレーライス35円、定食が40円、みそ汁5円……。カレーに肉片を見つける幸運はついぞなかった。このプレハブ食堂を、失礼にも、あるいは的確にも、「貧民食堂」と名づけた者がおり、通称「ヒンシヨク」と呼ばれてきた。ヒンシヨクの命名者は大賞ものであるが、食堂を運営する大学生協は毎週献立会議を開いて学生の記す「落書き帳」のなかの要望も参考に栄養士が創意工夫していた苦勞を忘れてはならない。米軍兵舎を再利用した建物群は少しずつモダンに建て替えられてはいっ



たが、その後も長く使われたのであり、コンクリートの講義棟・研究棟と、バラックのような残骸兵舎とのアンバランスなキャンパス風景は、ここで教養部の2年間をすごした世代には原風景になっているはずである。長く学生の空腹を満たしてきた「ヒンショク」のことだが、昨年、地下鉄東西線の工事のために取り壊されて一新したのが「Bee ARENA Cafe」なのだ。

今ふりかえて、2年間の教養部時代とは何であったのであろうか。少なくとも私には、身も心もかなり自由にさまよえた貴重なモラトリアムの好機であったのはまちがいない。安保闘争という歴史的な大衆政治運動を体感し、新聞部で多少とも世間に目が開かれ、北海道から九州南端まで一人旅を愉しんだ（沖縄へはパスポートが必要だった）。とりわけ、文学部に入学はしたものの20いくつも専攻があって選択にはずいぶん迷ったので、この時間的余裕はありがたかった。機械的で小刻みな単位制度にはなじめなかった。インターンシップのような自由な研修制度が、青年期、とりわけ大学入学後にはぜひ必要なのだとの思い込みがいま私にはある。でもそれは、所詮、自分で戦略的に創り出すしかないのかもしれない。

それから50年を経た現在、私は放送大学という「教養学部」だけの通信制大学で、その多くが中高年者である“学生”と日常的に接していることもあって、「教養」とは何かを問われたり考えたりする機会が多い。「教養とは何か」という問いは一見簡単そうだが、そのイメージも学習動機も十人十色である。この問いは、実は、西欧でも日本でもくりかえし論じられてきた難問なのである。「教養」の大切さは日本では大正時代から論じられている。何をもちて教養と呼ぶか。なぜ教養が大切なのか。そこには、その時代その時代の思想状況や政治状況、学校

制度が色濃く反映して変転してきた。そしていまや、多くの大学では「教養崩壊の時代」とさえいわれ、あらためて教養の重要性が議論されている。東北大学で教養部が廃止になったのは15年前の平成5年（1993）である。

ごく最近、法学者の刈部直氏が教養の意味と意義の時代史の変遷に着目して著した『移りゆく「教養」』が注目される。古今東西の諸説を批判的に比較検討しているからである。結論として氏は教養の意味と意義を次の4点に集約している。人が、世界をとらえ、しかもその世界が独自の原則にのっとって動いていることを、深く認めながら、それを理解し、世界とのおりあいをつけてゆくこと。他者が、自分とはまったく異なる志向をもった人間であることを了解しながら、ともに関係を保持し、新たに作りあげてゆくこと。そうした一連の営みを通じて、自分自身が変わってゆくこと。知識や情報としての「教養」をこえた、「教養」の極限と言うべき、こうした心の習慣が、「教養」の営みの基盤になる。

知識や情報の集積と、「教養」とを区別していることにまず留意したい。教養の基礎として、当然、「知識」は必要不可欠なのだが、しかし知識や情報をたくさん仕入れることがイコール「教養」ではないのである。さらに、「心の習慣」が教養の基盤だとすれば、その涵養は大学での教養教育だけで済むものではないし、大学だけが教養教育の場でもない。生涯つづく課題であり、大学は一つのきっかけにすぎない。

次のように問いかける、放送大学の校歌の一節を紹介しよう。なぜ学びつづけるのかがここに凝縮されているからである。

われら どこから来て どこにあるのか  
われら どこから来て どこへ行くのか



## 農を学び・教育を思う

総長特命教授(教養教育院) 秋葉 征夫

川内キャンパスで始まる

川内北キャンパスの国際文化研究科棟西棟5階の研究室から外を眺める。三つの講義棟、川北合同研究棟、管理棟、そして少し遠くにマルチメディア教育研究棟が垣間見える。私が川内教養部時代を過ごした46年前は2階建て以上のビルは無かったように思う。もちろん、5階からの鳥瞰像を楽しむこともできなかった。当時のキャンパスには占領米軍の残した建物が散在し、教会、平屋の建物（講義室に利用）そしてカマボコ兵舎（サークル室などに利用）が大学教育に使用されていた。すべての講義室のドアから出ればすぐそこは芝生のスペースがあり、講義後の休み時間そして時には講義を抜け出したの半時をその広場で友達と語らうのが楽しみだった。このような昔の光景を思い出すと、現在の整備されたキャンパスよりも45年前のほうが友人と身近に触れ合う環境だけは今以上にあったのかもしれない。

入学後すぐにサークルの一つ、軟式テニス同好会に入部した。中学・高校時代に軟式テニスをしていたので、そのまま何気なく続ける気になっていた。放課後のテニス、そして休日もテニスコートに通ってのテニス浸りの生活であり、川内時代の半分以上の時間をテニスコートと部室で過ごしたように思う。部室では多くの先輩・友達といろいろの話題で語り合っていたが、先輩が読書の楽しみ、そして読後の感想を語ってくれることが多かった。私自身は高校時代での読書経験がほとんど無かったといっても

いいほどだったので、このような先輩の語らいは新鮮でもあり、これはすぐに私に感染してしまった。当時の家にあった本から少しずつ読み始めたが、どうしてか日本の作家よりも外国の作家の作品を読むことが多く、アンドレ・ジイド、ヘルマン・ヘッセ、ドストエフスキーなどが比較的好きだったように思う。好きな作品の好きな文章・フレーズをノートに書き込み、それを繰り返し読み返し、そしてそれを友達と語らった。講義の哲学や社会学などを真剣に受講したのは、この読書の影響かもしれない。その当時の哲学の一つ（多分）である『実存主義』にも触れ、ジャン＝ポール・サルトル、キルケゴールなどにも嚙り付き、フーフーいいながらも著作を読み、椎名麟三の作品も2、3点読み通した。これらは楽しみと難解さに耐える苦しみでもあったように思うし、また、これらの経験は私の『引き出し』の一つになっていたのかもしれない。一方、これらの読書に比べると、専門領域の農学関連の講義を受けてはいたものの、自分で自ら進んで勉強したという記憶は余り残っていない。大学入学後の1 - 2年間に専門領域の学習に積極的ではなかったことの弱点は、後に私自らが思い知ることになる。

農を学ぶ

農学部キャンパスで、私は農学そして畜産学を、学び、その1分野である動物栄養学を専攻した。学部4年の後半から大学院修士課程にかけては以前に比べればよく勉強をしたと思って

いる。1, 2年生時での専門分野の勉学の遅れをキャッチアップしたかったのかもしれない。しかし、今思うに、学ぶ時期にはそれぞれ最も適切な時期があり、教養教育課程は当時の先生方が長年の経験と展望に基づいて設定したカリキュラムで構成されており、それに基づいて勉学するのが最も効果的であり適切であることなどには当時は思いも及ばなかった。この点で私は、たとえキャッチアップの努力をしたとしても、勉学の適期を見逃し、何か重要なものを獲得しそくなったものと感じている。

その後助手、助教授時代と研究中心の生活を続け、やがて研究以外に学部運営に関わる場面も増えてきた。特に、将来計画委員会の委員として、当時の学部長から農学の将来ビジョンを作ることを委託された。領域・分野の異なる5人の先生方と土曜日曜返上で、大学のあり方、農学と農業のあり方など、多くの本を読み、そして討論した。討論の中で自分の考え方を再確認し、あるいは修正し、そして他分野の考え方を理解し、そして必要な考え方を躊躇なく取り入れた。その意味では『ディベート・討論』がまさに大きな機能を果たし、そして私たちを成長させた有益な手段であったとも言える。この時点で、私は『ディベート・討論の力』という『引き出し』の一つを獲得したものと思っている。自分の専門だけではなく広い視点から、農学とは何か、生命・自然とは何か、そして農業の将来などについて真剣に考え得たこの作業は、私の大きな財産になり、その成果として「人間と環境のコミュニケーション農学 - 杜の都からの発信 - 」を出版することができた。

#### 教育を思う

私は昨年4月から新設の教養教育院の総長特命教授の一人として教育中心の任務を担うこととなった。「井上プラン2007」では、「教養教育は、学生にとって人間力を高め、世界に向け

て視野を広げ、専門教育の基盤を確立するために必要不可欠であり、異分野融合研究を創造していくためにも重要である」と謳われている。私自身が教養教育にかかわる機会はこれまで多くはなかったが、上記の理念を土台にして、以下の点を主眼にして1年生に対する講義を進めている。それは、卒業生の多くは学生時代の専門とは離れた領域でも中堅的な仕事をしている場合も多いことから、講義は文理融合型（学問領域に縛られない）の内容とすること、できるだけ広い分野への興味を引き出すこと、自分の研究（とくに学術探究の苦しさ楽しさ、研究の視点の設定法、研究の展開方法、総合化の大事さ、研究の失敗談など）を紹介すること、そして講義の中で学生に主体的な考えに基づく客観的・総括的な発表を試みさせる、などである。

学生には、学生時代にできるだけ多くの『引き出し』を作っておくことが大事であることをたびたび話しているが、1, 2年次はもっとも多様で幅広い『引き出し』を数多く作れる時期なのでないか。その契機を提供し、後押しをするのが教養教育の役割の一つであるように思う。教養教育とは何か、教育とは何かについて考えながら過ごしているが、研究とは違った意味で教育は苦勞の多い、そして充実感の深い作業であると感じ始めている。そして、教育に費す時間と労力を増やせば増やすほど自分の目指す教育を実行できる可能性が大きいことをひしひしと実感している。

教養教育が重要であることは論を待たないが、「学部教育」あるいは「専門教育」との対比のシナリオで「教養教育」を構想することだけが最良ではないようにも思う。すべてが『教育』であり、学生が将来においてそれを「教養」だったと考えるならば、それが「教養教育」であるようにも思う。これからも、南の窓から青葉山の木々を眺めながら、教育を思っていきたい。

全学教育通信（学生生活についてのご案内）

# コミュニケーション・ラウンジのご案内



## What's the Communication Lounge?

**コ**ミュニケーション・ラウンジは、マルチメディア研究棟1階のエレベータホール隣に開設された、ネイティブスピーカーのTAとコミュニケーションが楽しめるスペースです。  
また、英字新聞や衛星放送(CNN、BBC等)を視聴できるTVなども設置されています。

**コ**ミュニケーション・ラウンジは、学年・学部・履修している外国語の種類に関係なく、どなたでもご利用いただけます。  
また、外国人TAは日本語での質問にもお答えします。外国語が得意だという方はもちろん、外国語にあまり自信がない方も、どうぞお気軽にご利用下さい。

**ラ**ウンジには、曜日によって英語・中国語・フランス語・スペイン語のTAが待機しています。詳しくは、掲示ポスターや全学教育のホームページ (URL : <http://www.2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku.html>) でお知らせしますので、定期的を確認してください。

なお、待機時間は平日の14:00～18:00を予定しています。  
放課後だけでなく、授業の合間の空き時間などちょっとした時間にも、学内で外国語での会話を楽しみませんか？

\*場所：マルチメディア教育研究棟1F



平成21年4月

教育・学生支援部教務課



## 窓口案内

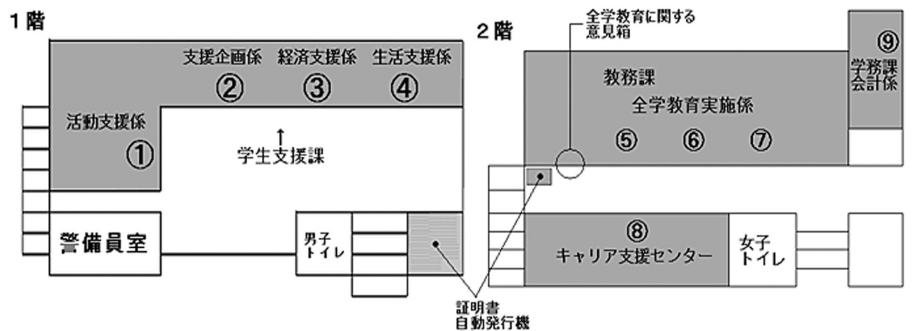
川内北キャンパス管理棟（A棟隣の建物）では、さまざまな学生支援のための窓口を全学的に設けております。学生生活で分からないことや不安なことが生じたときには、下記窓口へ気軽にご相談ください。

### < 1階 >

- ・①番窓口（活動支援係）・・・課外活動に関すること・体育施設等借用に関すること
- ・②番窓口（支援企画係）・・・忘れ物・落し物の問合せ、キャンパスライフ相談に関すること
- ・③番窓口（経済支援係）・・・学部1・2年次学生の入学料・授業料免除及び徴収猶予、奨学金等に関すること
- ・④番窓口（生活支援係）・・・主に学生寄宿舎全般に関すること

### < 2階 >

- ・⑤⑥⑦番窓口（全学教育実施係）・・・主に全学教育科目の履修に関すること、全学教育の授業（休講・補講・試験）に関すること
- ・⑧番窓口（キャリア支援センター）・・・学生の就職情報の提供やインターンシップに関すること
- ・⑨番窓口（会計係）・・・授業料，入学検定料，入学料徴収に関すること



## 「全学教育に関する意見箱」について

- ・全学教育に関する意見をお寄せください

本学における全学教育をよりよいものとするため、「全学教育に関する意見箱」を設置し、学生の皆さんからの「意見・要望」をもとに、改善・充実を図っております。

なお、意見箱は管理棟2階の教務課窓口の脇、及びB棟談話室に設置してあります。

いただいた意見につきましては、月2回収し、回答は投書された方が特定されない形で約1ヶ月後に「東北大学 全学教育」のWebサイトに掲載されます。

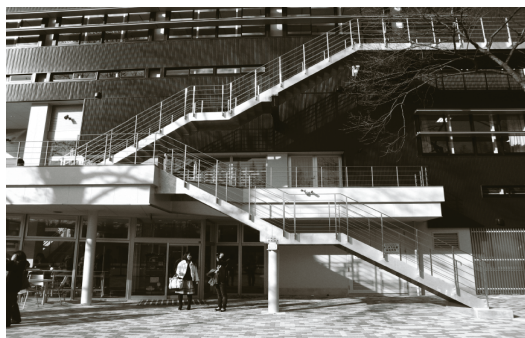
<http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku.html>

## 川内サブアリーナ棟が完成しました！

大橋先生（元放送大学宮城学習センター所長）の文中でも紹介されました「ひんしょく（貧食）」（川内第二食堂）及び武道場等の代替施設として建設が進められていた「川内サブアリーナ棟」が、昨年9月30日に完成しました。

ここでは課外活動施設のほかに、会議室や食堂（Bee ARENA Café）が備えられ、常にたくさんのお客様で賑わっています。

川内サブアリーナ棟（Bee ARENA Caféの様子）



### 「曙光」（しょうこう）の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

（命名及び表紙題字）元東北大学総長 西 澤 潤 一

# 重 要

## 平成21年度全学教育科目の授業日程について

平成21年度に、川内北キャンパスにおいて講義棟耐震改修工事を実施することになりました。それに伴い、3ヶ月を超える期間（7月24日～11月1日）、川内北キャンパスでは授業を行うことが出来なくなります。

そのため、平成21年度の授業日程については、土曜日にも授業を実施し、後期セメスターの開始を例年より1ヶ月遅らせて、実施することとなりました。

授業時間を確保するため、変則的な日程になっていますが、ご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、専門教育科目の授業日程については、それぞれ学部ごとに異なりますので注意してください。

次のページに平成21年度の学年暦を掲載します。

平成21年4月1日発行

編 集 東北大学学務審議会広報編集委員会  
橋 本 治 学務審議会委員長  
木 島 明 博 学務審議会副委員長  
小 野 尚 之 国際文化研究科 教授  
占 部 城太郎 生命科学研究科 教授  
前 川 禎 通 金属材料研究所 教授  
関 根 勉 高等教育開発推進センター 教授

発 行 東北大学学務審議会

## 平成21年度全学教育科目実施学年暦

4月	日	月	火	水	木	金	土	10月	日	月	火	水	木	金	土
	...	...	...	1	2	3	4		...	...	...	...	1	2	3
	5	6	7	8	9	10	11		4	5	6	7	8	9	10
	12	13	14	15	16	17	18		11	12	13	14	15	16	17
	19	20	21	22	23	24	25		18	19	20	21	22	23	24
	26	27	28	29	30	...	...		25	26	27	28	29	30	31
	...	...	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...
5月	日	月	火	水	木	金	土	11月	日	月	火	水	木	金	土
	...	...	...	...	...	1	2		...	1	2	3	4	5	6
	3	4	5	6	7	8	9		8	9	10	11	12	13	14
	10	11	12	13	14	15	16		15	16	17	18	19	20	21
	17	18	19	20	21	22	23		22	23	24	25	26	27	28
	24	25	26	27	28	29	30		29	30	...	...	...	...	...
	31	...	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...
6月	日	月	火	水	木	金	土	12月	日	月	火	水	木	金	土
	...	1	2	3	4	5	6		...	...	1	2	3	4	5
	7	8	9	10	11	12	13		6	7	8	9	10	11	12
	14	15	16	17	18	19	20		13	14	15	16	17	18	19
	21	22	23	24	25	26	27		20	21	22	23	24	25	26
	28	29	30	...	...	...	...		27	28	29	30	31	...	...
	...	...	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...
7月	日	月	火	水	木	金	土	22年1月	日	月	火	水	木	金	土
	...	...	...	1	2	3	4		...	...	...	...	...	1	2
	5	6	7	8	9	10	11		3	4	5	6	7	8	9
	12	13	14	15	16	17	18		10	11	12	13	14	15	16
	19	20	21	22	23	24	25		17	18	19	20	21	22	23
	26	27	28	29	30	31	...		24	25	26	27	28	29	30
	...	...	...	...	...	...	...		31	...	...	...	...	...	...
8月	日	月	火	水	木	金	土	2月	日	月	火	水	木	金	土
	...	...	...	...	...	...	1		...	...	1	2	3	4	5
	2	3	4	5	6	7	8		7	8	9	10	11	12	13
	9	10	11	12	13	14	15		14	15	16	17	18	19	20
	16	17	18	19	20	21	22		21	22	23	24	25	26	27
	23	24	25	26	27	28	29		28	...	...	...	...	...	...
	30	31	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...
	...	...	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...
9月	日	月	火	水	木	金	土	3月	日	月	火	水	木	金	土
	...	...	1	2	3	4	5		...	...	1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12		7	8	9	10	11	12	13
	13	14	15	16	17	18	19		14	15	16	17	18	19	20
	20	21	22	23	24	25	26		21	22	23	24	25	26	27
	27	28	29	30	...	...	...		28	29	30	31	...	...	...
	...	...	...	...	...	...	...		...	...	...	...	...	...	...

注1： 授業日は、曜日ごとに色分けされています。

## 【土曜日の授業日程】

月曜日の授業をする日	5/16. 6/13. 11/21. 1/9
火曜日の授業をする日	5/23. 6/20. 11/14. 1/30
水曜日の授業をする日	5/9. 5/30. 6/27. 11/28. 12/26
木曜日の授業をする日	6/6. 7/4. 12/12. 2/6
金曜日の授業をする日	7/11. 11/7. 12/19. 1/23

注2： 表中の日にちの下線は授業日を、日にちの下点線は補講日を表しています。

■（網掛け部分）は祝日等の休業日を示します。

注3： 7月16日（木）は月曜日分の補講を行います。

注4： 6月22日（月）は創立記念日ですが、授業日となります。